

魔道の世界に巻き込まれた一般人(笑)の物語

安全第一

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

何故かは分からないが、魔道の世界に巻き込まれた一般人が頑張るお話。

なお、主人公は一般人（笑）の模様。自覚はない。

目次

1. 何故か巻き込まれた。しかし私は一般人を自称する。 | 1
2. 何故か魔道学園に入学する事になった。それでも私は一般人を自称する。 | 19
3. ツンデレさんと邂逅した。逃げる様に私は一般人を自称する。 | 35

1. 何故か巻き込まれた。しかし私は一般人を自称する。

どうも、おはこんばんにちは。私はごく普通の学生生活を送る単なる一般人である。

む、単なる一般人と自称するのは可笑しいか。しかし一般人と名乗るにははつきりとした理由はある。

何故ならこの世に生を受け、今まで厄介と言える様な出来事にも遭遇せず、大怪我や重度の病に罹る事もなく何不自由なく過ごして来たのだ。故に平凡な人間だと自負出来る。ただこの一人称だけは生来のものである故、どうか許して欲しい。

勉強の面においても同じ。高校の成績は中の上。平均点より多少上回る程度の点数を取るだけの学力が有るのみ。これも普通の学生ならではものだろう。

だからこそ私はこれから先もただ普通に何事もなく生きていくのだと思っていた。

ある日の朝。世界が崩壊していた。

……比喩に非ず。文字通り世界が崩壊していたのである。私自身、何が起きているのかさっぱり理解が追いつかなかった。

その日も普通に起床し身だしなみを整え、マーガリンと苺ジャムを塗ったトースト二枚を食した後、革靴を履いて玄関と扉を開けた。そこまでは普通だった。

しかしその後が問題だ。いつもの光景が広がっている筈が、それは掛け離れたものが私の目の前にあった。

地形が無に帰り、人々が光の粒子となって消え去っていく光景。そして何よりあり得ないものが目に入った。

黒い太陽。

日食などでは無い。黒い霧が掛かったそれは異常であり、世界が崩壊しているのだという現実を私が認識出来たのもあの黒い太陽であった。

しかしそう気付いた時には時すでに遅く、崩壊が目の前まで迫っていた。

……成程。私はここで消えるのか。

私は単なる一般人。主人公でも無い限り、世界の崩壊に抗える訳もない。抗おうとしても手段を持たない非力な私ではどうしようもあるまい。

ならば良し。一般人なら一般人らしく、大人しく消え去ろう。他の人間と同じ結末を迎えるのもまた一興。またの来世に期待しようか。そして私は崩壊の干渉を受け――

――る事はなく、私を避けて背後にあつた自宅が消え去つた。

……どういう事だ。何故消え去らない。まさか私が何かを持っているのか……？

いや、まさかな。これは偶然だ。今まで普通であつた私が主人公補正などというご都合主義を得た訳でもあるまいて。もしそうだとすれば何と陳腐な展開なのやら。

しかしそう思考している内に世界は何もない無となった。まるで宇宙空間の様だが、煌めく星々の輝きがない為に興味は抱かずに終わる。

さて、どうしようか。足場も無いこの世界だが、どうやら歩ける様だ。このまま空中散歩？に洒落込んでも良いのだが、如何せん私には余裕がない。この何も無い世界から脱出する手段を見出さなければ一生このままだろう。この現状故、救助も望めないであろうから、これは私がどうにかしなくてはならない。

ふむ、どうすべきか。私の考察からするに、非現実的な現象が発生してこの有様になったのだから、非現実的な方法で脱出するのが最も

有効だろう。

だが私は一般人。何の力も持たない人間。非現実的な手段を取ろうとしても取れないのだ。

しかしそうしなければここから脱出する事は不可能だろう。非現実的な現象に現実的な方法で対処出来る筈もあるまい。

駄目元で考えてみるとしようか。

——空間破壊。

——空間跳躍。

——世界創造。

——因果律崩壊。

——永劫回帰。

——宇宙滅却。

——滅尽滅相。

……こんなものだろう。何となく後半からは非現実すらも塵芥にしか感じられないようなものだったが。

しかしこれくらいでなければ脱出出来ないだろう。

……よし、これは私によるほんの細やかな抵抗故に只の悪足掻きに過ぎないが、出来る限りの事をやってみるとしよう。

脱出出来た。

なんだかよく分からないが、兎に角脱出出来た。恐らく世界が崩壊した時より驚愕の度合が大きいと思う。

取り敢えず、世界に穴が生じる程度の衝撃を入れなければならないと考え、それなりの非現実的現象を頭の中で想像してみた。すると不思議な事に奇妙な言語が口から勝手に溢れ、直後に想像した非現実的

現象が発生した。あの時発した言語は一体何の言語だったのかは一切不明だ。

そして非現実的現象が発生した結果空間に穴があき、そこから脱出した。一応、最悪の事態からは逃れられただろう。

しかし、私が想像した現象が現実となつて発生してしまうとは。思わずポルナレフ状態になつてしまった。いや、せざるを得なかった。やはり、私には何かがある様だ。だが、あの様な非現実的現象をここで起こすとしてもない事になるに違いない。

とはいえ、どうやら私が本気で強く想像しなければ発生しないようだ。何となくで想像しても何も起きなかった。もしかすると、単なる神の奇跡だったのかも知れない。

さて、ここは何処なのやら。

私が今居る場所は豪華だが少し古風な建物、いや校舎だろうか。元の世界……だと予想するが、この建物が世界の何処かにあるとは思わなかった。

そう感心し辺りを見渡していると、怪訝な表情の少女が一人、建物の中から現れた。女性としては少々背が高く、胸は大きい。

何という事だ。この少女、とんでもない胸をお持ちになっているとは羨ましくしからん。あ、これはいけない。このまま嫉妬して憤死してしまう所だった。

しかし少女が警戒するのも無理はない。無の世界から脱出したらこんな場所に降り立っていたのだ。紛れもない不法進入である。そう思うと拙い状況下に置かれている事を自覚し、内心冷や汗が吹き出る。

こんな一人称だが、実を言うと私はかなり動揺し易い。一度パニックに陥ると、私自身何をしているのか分からなくなるケースがしばしば。つまりただいま絶賛動揺中である。ヤヴァイ。助けてリヴァイ。すると、少女が私に何者かと問いかけて来た。

私が何者なのか、か。先程の出来事を経験した直後である故に、私

が人間なのかどうか私自身も分からなくなっている。だが、それでもごく普通の一般人と言い切るしか無い。今までそうして生きて来たのだから、そう自称するしかないのだ。

しかし、本当にそう言い訳出来ているか不安だ。現在絶賛動揺中である為、的確に説明出来ていない可能性がある。

しかしこうしている間にも、動揺の所為か緊張のボルテージが上がって来た。私の外側やこの一人称は平然としているが、内心はしつちやかめつちやかである。

魔王候補？ 初めて聞く単語だ。しかし今の私に冷静に物事を考えていられる余裕は皆無。はつきり言って緊張のあまりショック死しそうである。私の外側はもう何を言っているのか分からない。

すると突然、少女が私に向けて攻撃を仕掛けて来た。しかもやたら大きいライフルの射撃で。というか何処からライフルなんて物騒なもの持って来た。

これには私も驚愕し、無意識的に防御を想像した。刹那、目の前に障壁が現れ、攻撃を防ぐ。やはり私が強く想像する事で一定の現象が発生し、奇妙な詠唱のようなものを同時に唱える事でより強力なものが発生するらしい。

だがそんな場合ではない。今ので緊張のボルテージが天元突破してしまった。もう瀕死の状態である。誰か胃薬を持って来て貰えなيدらうか。胃潰瘍になって吐血しそう。

それに私の説得も虚しく、少女は私を危険視してしまった。最悪の展開だが私はそれどころではない。何故なら緊張の余り死にそうだから。

こうなればヤケクソだ。このどうしようもない天元突破した緊張から解放される為（というかストレス解消）に付き合っ貰おう。

あの少女。一見してただの美少女だと見えるが、ライフルをぶっ放して来た事もあり、只者ではない。あの射撃も実力の内には入っていないのだろう。途轍もない強者の感覚が感じ取れる。

ならば、この程度の現象も簡単に対処される筈。

私はそれを想像し、自動的に口から発せられる奇妙な詠唱と共に想像という空想を現実へと変換させる。いつの間にか宙に浮いていたが気にしない。

それにしてもこの奇妙な詠唱、やたら厨二病の患者が好みそうなのだ。

……そう考えると、私は現在進行形で黒歴史を作り上げているのではないだろうか。駄目だ。羞恥の余り転げ回りそうである。

私がそう内心悶々としている間に巨大な流星が衝突した。

だが、やはり予想した通りなのか、あの少女には簡単に防がれてしまった様だ。しかもあれほど巨大な流星だったのにも関わらず、被害が圧倒的に狭い。

それに彼女の表情。あれは私に失望した表情だ。私のお粗末な想像に対し残念だと言わんばかりの感情が出ている。この力自体、付け焼き刃のようなものだからそれにすら気付いているのだろう。

世界は広いと改めて痛感させられた。極度の緊張から落ち着いてきた今、思い返すと心の何処かでこの摩訶不思議な力に酔い痴れていたのではないだろうか。もしもあの少女が防げず流星が地面に衝突したら、こちら一帯の人や地形が蒸発してしまうなど分かりきった事実だろうに、私はそれすらも見失っていたのだ。

当然緊張という原因もある。だがそうであつても周りまで巻き込むなど御法度であろう。

私はなんと滑稽なのだろうか。こんな脆弱な力に溺れていたとは。何様のつもりだ。

私は一般人。こんな力を持っていても私は私、一人の人間なのだ。神様でも何でもなく、この世界を生きる一人の人間に過ぎない。冷静になった今だからこそ理解出来る。

これは私への生涯の戒めとなるだろう。それを教えてくれたあの少女に感謝の念が絶えない。同時に実感した。

その時、誰もが聞いた。

それはまるで己の耳に直接聞こえてくる様な謳であり、ノイズ塗れのその謳に誰もが嫌悪感を抱いた。

「!?」

少女、浅見リリスは戦慄した。そして冷静に状況を分析する。

先程、とある街で崩壊現象が発生。当然ながら街は地球上の地図から消え去り、浅見はその原因の調査に向かうべく準備をしていた。そして直後の謳である。

すると突如として強烈な揺れが引き起こる。

「い、一体何なのですか!? それにこの震動……! ただの地震じゃない!」

普通なら地震だと感じ、悲鳴の一つでもあげるのだろうか。しかし彼女は違った。

彼女、浅見リリスは各分野の魔道を極めし七人の一人、トリニティセブンである。故にこの揺れの正体が何たるかを理解していた。

これは地震じゃない。ただの衝撃波だ。

証拠として、窓硝子が割れていない。本当に一瞬の揺れだった為に、硝子が割れるほどでは無かったのだ。

「ッ」

浅見は急ぎ足で学園長室へと向かう。この異常事態を彼がどう捉えているのか確かめる為である。

「学園長!」

勢い良く学園長室の扉を開ける。彼女の目の前には彼が椅子に座していた。

「やっぱり来たかリリスちゃん」

彼こそ『大魔公』と呼ばれる世界最高峰の階位を持つ魔道士であり、このビブリア学園の長を務める男である。

彼は余裕を保った表情でこの状況を自身の視点で告げる。

「ふむ、さつぎの理解不能な言語に世界規模の衝撃波。これは魔王候補か、あるいは魔王よりもおっかないヤツが来ちやったかもねえ」

「魔王よりも……おっかないヤツ……?」

魔王よりもおっかないヤツ。その言葉に浅見は反芻して訊き返す。

「僕の分析から言わせて貰うけれどね、これを引き起こした相手の実力は未知数としか言いようがない。

あのノイズが混ざった言語。もしかすると『旧世界の言語』かも知れない」

「旧世界の言語……?」

「そう、僕にも詳細は全く分からないんだけど、魔道を極めている過程でそんな事を聞いた覚えがあるんだよ」

「そんな言語があるなんて……」

「何でも■■■■が使っていたとかなんとか——」

刹那、凄まじい神威が辺りに走る。

「!?」

「おや、おいでなすったようだね」

まさか、こんなに早く此処を特定して来るとは思いも寄らなかった。このビブリア学園はそう簡単に見つからない場所に位置している。更には認識阻害の術式が掛けられてあるのだ。それを容易く看破し即座に位置特定してしまうほどの離れ業を披露して来るとは。この離れ業は大魔公並みの高位魔道士ならではの高等技術である。

現在、浅見を除いた他のトリニティセブンは私用で不在の身。唯一学園内にいる強欲^{アフリティア}は地下の部屋にて自分の夢の中。怠惰^{アケテティア}は現在行方不明。この場で戦えるのは浅見と学園長のみ。世界最高峰の魔道士である大魔公がいるものの、その大魔公すら未知数と言わしめた実力の相手には些か戦力不足と言えた。

しかしこのままでは状況が悪化していく一方。何とか活路を見出さなければならぬ。そして浅見は覚悟を決める。

「……私が行きます」

「……分かった。僕も相手の魔力を出来るだけ解析アナライズしてみるよ」

そう言うや否や学園長室を飛び出し、発せられている神威の下へと向かう。

彼女がそこへ辿り着き、正体不明である相手の姿を確認する。一体、この凄まじい神威を発している者は誰なのか。

「えっ……っ？」

だが、浅見はその姿を見て驚愕した。

“妖精”

正にそう形容出来る程の美しさと儂さを併せ持った『幼い少女』だった。

腰まで届く青みが掛かった長髪に翠の瞳。肌は雪の様に白く、身には何処かの高校の制服を着ている。

だが、彼女の外見の年齢は見るからに九から十そこらと幼い。無表情でありながらその可憐な容姿もあり、とてもではないが彼女が神威を発しているとは思えない。

(こんなに幼い子が……？ 確かに、この子があの現象を引き起こしたなんて到底思えない……)

しかし、浅見には分かるのだ。彼女が神威を発しているのだと。すると少女がこちらに視線を向ける。どうやらこちらの存在に気付いた様だ。

そして浅見は問う。

「貴女は、何者ですか……？」

その問い掛けに少女は無表情のまま少し間を置き、返答する。

「……人間。」

気付いたら、此処に居た。……ただ、それだけ。

だから私は、人間」

それは妖精に相応しい綺麗な声音で、一種の魅力が備えられていた。

やはり、彼女は何処か人間離れしている。例え普通の人間だとして

も、彼女ほどの人間がこの世に存在するだろうか。

否、存在しない。

「……貴女には魔王候補の疑いがあります」

これ程までの圧倒的な存在がいようとは。触れればすぐに砕けてしまいそうな儂さと幼さを持ちながら、空間が歪むほどの悍ましい神威を発している矛盾した人間。いや、化物なのかも知れない。

先の彼女の話も曖昧なものである。人間だと自称しているが、果たしてどれほどの人間が彼女を同類として認めるだろうか。

もしも彼女が魔王候補であれば、それこそ世界の危機。本来トリニティセブンから選任され、崩壊現象を除去し抑止力となる集団、『王立図書館検閲官』の山奈と不動がこういった問題に対処するのだが、今日に限って不在である。それ故、トリニティセブンである浅見が喰い止めなければならぬ。

幼い少女に攻撃するのは抵抗がありとても気が引けるが、世界の為でもある。せめて気を失わせている間に魔王因子のみを抜き取り、記憶操作をした後に自由にしてあげよう。

「だから貴女には少し眠って貰います。殺しはしません」

浅見はライフルを魔道で創り上げ、少女に向かって狙いを定め、射撃する。対する彼女は一步も動かず、このまま麻酔の術式を施した弾丸が直撃する。

筈だった。

「!?!」

それはあつさりと防がれる。しかし驚愕すべき点はそこでは無い。彼女が展開した障壁。

その数は一〇八。

その障壁一つ一つが次元断層に加え、衝撃を相転移させるもの。つまり一つの障壁が究極の防壁であり、それが一〇八も重なっている絶対障壁である。

その超高度な術式を『アーカイブ書庫』の接続無しで、それも一瞬で構築してしまうとは。

(この超高等技術……！　なんて子なのですか!?)

浅見は思う。学園長の言った通り、魔王よりも悍ましい存在が来てしまったのかも知れない、と。

その浅見の様子を見た少女は、今まで無表情だったそれを悲哀の表情に変えてポツリと呟く。

「……私、貴女に敵意、無い。でも、貴女、攻撃して来た。

だから——」

——目には目を。 齒には齒を。

「ッ!?!」

ゾクリ、と浅見の背筋が凍る。本能が危険だと警鐘を鳴らす。理由は単純、彼女の神威が先程よりも桁違いに溢れ出た事によるもの。

何と言う神威。何と言う圧力。下手をすれば指先一つで存在そのものが消し飛ばされるまでのそれは世界法則を超越していた。

次元が違う。格が違う。浅見リリス達トリニティセブンが極めた各分野の魔道などでは比較にならない極大の歪みがそこにある。

彼女は無限の宇宙。己の渴望が形となった理を以って、他の総てを塗り潰すもの。

曰く、万象を型に嵌める神格ほうそくそのもの。

『ここに天地位を定む』

いつの間にか天に浮いていた少女。その少女にしか出来ない少女だけの呪を紡ぎ出し、それに合わせて■■が揺らめく。

すると組み替えられる森羅の理が軋みながら、■■■の万象が位相を変えてこの世界へ顕れる。

そして中天から嵐の乱雲が穴を穿たれ、徐々に広がって行く。

『八卦相錯って往を推し、来を知るものは神となる』

次に少女の虚空に踊る十指の動きが尾を引く蛍光の軌跡となつて、何層にも及ぶ立体の大曼荼羅を織り上げた。

『天地陰陽、神に非ずんば知ること無し』

まるで何かを通すための道を開いたかのように、そこに集中する極大の神気は天を震わせ、穴を穿つ。

最後に、呪力の密度は幾何学的に膨れ上がり、呪法が励起される。

『凶に敗れし者、凶の星屑へと還るがいい』

そして中天——少女の呼びかけに答えるかのごとく、計都彗星の威容が宙の果てから燃える大火球と化して迫り来るのであった。

『——計都・天墜』

「——あ、それは……っ!?!」

その荒唐無稽な光景を目の当たりにした浅見は絶句する。

空から迫り来る計都彗星。あれに巻き込まれるは愚か、直撃してしまえば魂ごと滅相される。あの術式とは言えないそれは最早魔道なのかどうかすら疑うが、そうなってしまうと確信する根拠があった。あれは見せかけではなく、確実にそうなるであろうものなのだから。

「ッ！ 光滅せよ！」

“ヘルミツク・バスター”!!!」

浅見は即座に迎撃する。

“ヘルミツク・バスター”

バスターモードで錬成したライフルから放たれる強力な魔力光弾。
錬金アウター・アルケミック術を応用することによって、かなりの魔力を生み出しており、着弾と同時に大爆発を起こす。破壊力が高い上に派手な魔術でもある。

ライフルから撃ち出された魔力光弾は一直線に計都彗星へと向かい相殺しようとした。

しかしそれは徒労に終わる。

「そ、そんな……!?!」

呆気ない。それが浅見が抱いた感想だった。

計都彗星に衝突した魔力光弾はまるで紙のように容易く引き裂かれ、脆くも塵となった。

「くッ……!」

眼前の現実には浅見は歯噛みする。今から『魔道極法』ラストクレストを発動しても間に合わない。加え、『魔道極法』は使用に生命に関係した代償を支払わなければならない。

しかしこの現状では悠長にしてられない。だが行動を起こした所で何もかもが遅い。

「ここままで……ですか」

最早これまで。計都彗星が迫り来る中、浅見は自らの死を覚悟した。

瞬間、浅見の前に幾層もの障壁が構築される。

「ッ!!」

浅見を守るように現れた障壁は計都彗星と衝突。凄まじい爆風と熱戦が浅見に襲い来る。だがそれすらも障壁が防ぎ、辛うじて防御する事に成功する。

「この障壁、学園長が……」

あれ程の荒唐無稽な術に対抗出来る存在とさえ浅見が思いつく

辺り、大魔公である学園長しかいない。

あの時、展開された障壁は百五十七。あの一瞬で構築するという最強の魔道士たる大魔公の実力の一端が垣間見られた瞬間である。

更に百五十七もの障壁には一層ずつ全く違う効果を付与していた。ある障壁には衝撃緩和、また別の障壁には爆風無効化など、凡ゆる魔術を駆使した絶大な堅牢さを誇る防御壁だ。しかしその防御壁をして計都彗星の前には辛うじて防ぎ切る程度。改めてあの幼い少女の力が強大であるかを思い知らされた。

「ふう〜、何とか間に合った様だね〜」

「学園長!」

浅見の隣に現れ、一息吐く学園長。雰囲気は依然と変わらず飄々とした態度。だがよく見れば、頬に汗が伝っている。

(いやあまさか解析が全く意味を成さないなんてねえ。対抗手段が無いし、あの隕石が僕が思い付く全ての魔術障壁を構築してやっと防げるレベルだなんて、どんだけヤバいのあの子!? 下手したら大魔公クラス以上だよ!?)

学園長の内心は巫山戯つつも、少女の実力に驚愕していた。

しかもあの魔術障壁を構築した際に魔力の三分の一を消費した。それに対し、少女の神威は衰えるどころか今でも増幅するばかりで消耗の兆しすら無い。はつきり言つて長期戦に持ち込めば敗北必至である。

「どうする? ぶっちゃけ勝ち目ないよ」

「……その様ですね。せめて、話し合いで解決したい所ですが……」

「……まあ、君が最初に攻撃しちゃったもんねえ〜」

「うっ……! っ、それを言わないで下さい! 私も後悔しているんですから……」

二人がこうして話し合いをしている所に攻撃を仕掛けられては拙い。浅見も学園長もそれには嚴重に意識を集中しているが、一向にして少女が追撃を掛ける様子は無い。

「しかしどうしちゃったのかな? あの子全く攻撃の意思がなくなつたみたいけど……」

「一体何を考えているのでしょうか……」

すると、少女から溢れ出ていた神威は鳴りを潜め、何も感じ取れなくなり、天に浮いていた少女が地に向けてゆるりと降下して行く。

少女が地に足を着け、その無表情のまま二人を見据えた。感情が全く顔に出ない為、その思考を読む事すら出来ない。

そして彼女は手を上げ、浅見が身構えると――

「降参」

突如として降参の意を示した。

「……………え？」

この予想外の行動に思わず台詞が被る二人。

一体どのような心境があったのかは分からない。だが、少女が降参の意を示したのは間違いない。畏とも考えられなくもないが、神威が全く感じられない事からするに、その意思は無いだらう。

「それは……………どういう事ですか？」

浅見が訊ねる。本人の意思確認を聞いておきたいからだ。

「私、争いに来た訳じゃない。朝、世界が壊れてて、それに呑み込まれて、脱出しようと頑張っていたら、ここにいただけ。嘘じゃない。信じて」

「！」

世界が壊れていたという少女の言葉。それは恐らく崩壊現象を指すのだろう。彼女はそれに巻き込まれたが、消滅せずに何らかの方法で脱出したようだ。それを本人なりに懸命に説明しようとしているその純真さに心が揺れる。

「それに、私、大切なこと、忘れてた。でも、貴女がそれを思い出させてくれた。ありがとう」

「えっ……………」

在ろう事か、少女は浅見に礼まで述べて頭を下げる始末。

一体何が少女の心を揺さぶったのだろうか。浅見にはそれに思い当たる節が見当たらない。

だが、浅見には理解出来た事が一つある。

この少女は、己では一生越えられない存在だと。

実力の差もある。あの計都彗星を見舞われたのだから、彼女との差は歴然。絶望的なまでの力量を感じる。だが浅見が理解したのはそこではない。

あの少女は、此方が先に手を出してきたのにも関わらず、それを全く咎めようとはしない。寧ろ、自分自身に非があるのだと言わんばかりの言動と態度。

勝てない。素直にそう思わされた。あれ程の幼さで、既に浅見よりも成熟している倫理。どれほど濃い人生を体験して来たのだろうか。それは推し量れない。

「抵抗、しない。煮るなり、焼くなり、好きにして」

「ま、待って！ 頭を上げて！」

戦意すら残っていない様子少女の少女。その少女を文字通り煮るなり焼くなりするほど浅見は外道ではないし、そこまで堕ちたつもりもない。慌てて頭を上げさせる。

「……………」

「ツ……………！ そ、そこまでされると逆に私が困ります……………！」

その浅見に対し無表情のまま、こてんと頭を傾げる少女。その仕草に心を奪われかけた浅見だが、何とか自制し、一つ質問を問う。

「あの、貴女の名前を聞いていなかったのですが、お聞かせ願えますか？」

「……………あつ」

その問いに、今まで気付かなかったようにハツとした表情を浮かべる少女。その無表情故にあまり表情筋は動いていないのだが、それでも愛嬌さがあった。

「すっかり、忘れてた。私の名前、言ってない。

私の名前は——」

——カール・エルンスト・クラフト||メルクリウス。
少女は、そう名乗った。

2. 何故か魔道学園に入学する事になった。それでも私は一般人を自称する。

どうも、おはこんばんにちは。私は至って普通の一般人である。む、前にも似たような紹介をした覚えが……。いや、余り気にするほどでもないだろう。

それよりもだ。私は世界の崩壊という現象に遭い、摩訶不思議な力を使えるようになった。原因は全く分からない。

私はその摩訶不思議を以って無の世界から何とか脱出し、見慣れない校舎の広場に降り立つもとい、不法進入をしよう事に。当然ながら、内心パニックに陥ったのは言うまでもない。

そこで胸が大きい少女と一悶着を起こしてしまい、結果として降参した。まさか真打登場と言わんばかりの謎の男性が現れ、二対一と圧倒的不利に陥ったのだから仕方ない。

それからしばらくの間、どのような処遇を受けるのかと内心恐慌状態になりながらその時を待っていた。

そして学園長室に呼び出され、眼鏡の男から宣告を言い渡される。

……ん？ この学園に入学しろと？ それは一体どういう事なのか。

いや、少し考えれば分かる。つまりこの学園に入学する事で処分を見送るのだろう。だが、当然ながら監視付き。例えば無期懲役の刑務所生活という訳だ。

私個人としては、もつと厳しい刑罰が執行されるかと思っていた。鞭打ちとか主に拷問の類いを想像していたので、この処遇には願ったり叶ったりだ。

それに、私には住む場所が無い。先刻私が巻き込まれた世界の崩壊と共に自宅も消失してしまったのだから、困り果てていた所である。私に通っていた学び舎も丸ごと消失してしまったので、これを機に新しい学生生活を送れるのなら嬉しい事この上ない。

どうやらこの学園は寮生活が中心らしく、敷地面積が非常に広い。

恐らくだが、有名大学より広いであろう。

衣服に關しても制服を後日支給してくれる様だ。……しかし些か処遇が軽すぎるのではないだろうか。

いや、油断は禁物。きつと私が油断して気が緩んだ所を襲うつもりだ。その後は拷問を科せられ、私の持つ摩訶不思議な力について洗わざらい吐かされるに違いない。想像しただけでも身震いする。

此処に安息の地は無いようだ。精神面での苦痛から攻めるつもりか。なんと陰湿な刑罰なんだ。本格的に私を殺しに掛かっている。

まあそうだとしても、衣食住を確保出来たのは大きい。これは有難い事だ。その点だけは学園長に感謝しよう。

それと、私が質問した時に酷く驚いた様な表情をしていた。はて、私が何か可笑しい事を言ったのだろうか。恥ずかしくて堪らない。

現在、私は転校生という事でメイガス達に紹介する為に教卓の隣に立っている。

以前にも言ったが、私は動揺し易い。つまり私がどのような状態になっているのかは誰もが分かる筈。

緊張し過ぎて死にそうだ。

内心バクバクである。冷や汗すら出ている。大勢の前で自分を見せびらかす程、私は大胆ではない。寧ろ逆だ。

それにメイガス達の視線が怖い。こんな変哲もない一般人が超常の存在である魔道学園に居るのだ。変人だと思われても仕方ない。変態と思われていたら精神的に大ダメージを負うが。

そしてもう一つ、私の緊張のボルテージが極限まで達してしまっている理由である。

浅見リリスが教師であった。

何という事だ。この少女、生徒ではなく教師側だったとは。計算外にも程がある。

幾ら私に非があるとはいえ、ここまでやるとは汚いぞ魔道学園。徹底的に私を監視下に置くつもりか。

生来、ここまで束縛を受けたのは初めてだ。こんな未知、私は要らないというのに。

ここはさっさと自己紹介を済ませてしまおう。緊張で内心死にかけているが、これを持ち切れば何とかなる。

いや待て、パニックに陥っている私は自分で何を言っているのか分からないのだった。これはヤヴァイ。益々パニックを加速させるだけではないか。死にそう。

限界だ。堪らず私は浅見リリスに一言伝え教室から出て行き、その場を離れる(当然、浅見リリスに何を言ったのかすら分からない)。しかしこの行為は現在進行形で醜態を晒してしまっているようなもの。転校初日から失敗してしまうとは公開処刑ものである。ぎゃーす。

とはいえ、黒歴史を量産してしまうよりは遥かにマシだ。笑いものの種にでもなれば即死してしまうレベルである。

私はしっちゃんかめっちゃんかになっていく内心を落ち着かせる為に静かな場所を探す事にした。それと同時に学園長から受けた説明を思い返す。

この学園は魔道士の育成を目的とするらしい。学園長は魔道士を“メイガス”と言っていた。

メイガスは人の道を外れ、文字通り魔道へと踏み込んだ者の総称だとか。あの生徒達も見習いではあるが全員メイガスという事か。私自身は人の道を外れたつもりはないのだが。

彼ら彼女らは世界の理から外れ、異世界・異次元・超常現象などの

研究を続けている。その為、個人のずれた精神、主張が基礎的資質となっており、人間の倫理観から逸脱した思想家が殆どを占めている。つまりあのメイガス達は皆んな狂人で戦闘狂のヒヤツハー集団だったという事か。何て危ない学園なんだ此処は。(※違えます)

その魔道士達は皆が全て、魔道書なるものを手にする為に研究に励んでいるらしい。だが生憎と私は魔道書のようなものは持ち合わせていない。むしろ必要無いと思う。

私が思うに魔道士というより、魔術師や錬金術師の方が浪漫があるのではないだろうか。いや、これは私が思っているだけで、魔道士と魔術師はあまり変わりが無いのだろう。

それはさておき、学園長が言うには魔道には各分野があるらしく、『傲慢』、『怠惰』、『強欲』、『嫉妬』、『憤怒』、『暴食』、『色欲』の七つに分類されているようだ。これらが『書庫』に納められており、メイガス達は意識と精神を飛ばして接続する事で魔道を使用するとか。もしかすると、私も無意識でこれに接続していたのかも知れない。

そして、私と一悶着起こした相手である浅見リリスは各分野の魔道を極めし者である七人、『トリニティセブン』の一人らしい。

やはり彼女は強者だった様だ。どうりで流星を墜としても容易に迎撃される訳だ。

しかもそれが七人いるとなれば、私が生き延びる確率が格段に下がってしまったっている事は自明の理。これから先、彼女達との接触は避けた方が良いだろう。私の平穩の為である。少しでも長く享受していたいのだ。

さて、私もこの魔道学園に入学するというのならば、それなりに魔道を研究せねばならない。特にトリニティセブンに対抗する手段を講じる為にも必須なものである。

魔道士見習いは、まずそれぞれの「テーマ」探しから始まる。そして魔道士自身の「テーマ」を研究し、成果を出して「実行」に移すことで術式魔カを使うことが可能となる。私もここから始めるべきだろう。

……なのだが、一般人である私にはさっぱり解らない。私の持つ摩訶不思議な力の場合には想像と奇妙な詠唱だけで充分であり、其方の方

が解り易いのだが、摩訶不思議な力をより確固にする為だ。出来る限りの努力はしよう。

取り敢えず、魔術に関する書物を読み漁るとしよう。それに都合良く、図書館へと辿り着いた。

早速、十冊程度の魔術関連の書物を抜き出し、適当に読む。

そこで私は違和感に気付く。

……どういう事だ、これは。

まさかと思い、十冊程度の書物を読み流し、そこでも違和感を感じ取る。別の書物を抜き出し、それも読んでみた。

間違いない。だが私にはこの違和感の原因が全く掴めない。だが、確かに違和感を感じている。これは何なのだろうか。

——私はこの書物を全てを読んだ事がある。

既知感、とでも言うべきだろうか。いや、この既知感は寧ろ懐かしさを覚えるものだった。

何故、既知感を感じたのか。これは私の持つ摩訶不思議な力に関係するのだろうか。

しかし、余り気にする程でも無い。逆にこの既知感は私を落ち着かせてくれる。悪くない。

人生は未知を既知に変える作業とは良く言ったものだ。む、これは誰の言葉だっただろうか。まあ良い。

私は日が暮れるまで書物を読み漁る事に没頭した。書物を一つ読む度に魂が歓喜している。「ふむ、これは確かそういうものだったな」と私でありながら別の私が思い返し笑みを浮かべている気がして。

いつの間にか私は五百以上もの書物を読了していた。しかもその内容は一字一句覚えていく。

不思議な事だが、一冊読む毎に幾百の魔術を使えるようになった感覚がするのだ。今の私はどれ程の魔術を使えるのだろうか。

ふむ、本当に私は平凡な一般人なのだろうか。いよいよ解らなくなつた。

だが不安は無い。理由は一つ、魂が主張しているのだ。今のままであれば良いと。

私は一般人である。故にそうなのであり、これは誰にも干渉する事は出来ない。自己完結の世界に否定の要素は入り込めないのだ。

私は学園長から用意された部屋に入り、ベッドの上に乗る。ふう、と溜息を一つ。

まさかこの短期間でこれ程の体験をしようとは。関ヶ原の戦いもビックリである。いや、私にしたら戦が一日で終結した関ヶ原にビックリなのだが。

さて、少し魔術でも使ってみるとしようか。まずは私が密かに憧れを抱いていた錬金術と行こう。

元々、これは黄金を創り出す技術の追究を中心とし、不老長寿の霊薬の調合と重なり合う中で、広く物質の科学的变化を対象とするに至つた古代・中世における一種の自然学だ。この知識は図書館の一件で思い出した既知の一つである。

等価交換の法則もあるらしいが、錬金術とはまた別のものだ。両手を合わせて地面に手を付け槍とかを創り出す現象は正に浪漫なのだ。私の中にある既知の知識はそうでは無かつた為、内心残念に思う。すると突如として、この部屋に違和感を感じ取る。地震と停電が同時に引き起こされ、事故か何かかと推測する。

だが何時まで経つても違和感が払拭されない。取り敢えず真っ暗のままでは何も見えないので魔術で明かりを点ける。あれ、魔術を使うのはこれが第一号ではないだろうか。あの時の超新星爆発や流星墜落は魔術ではないと思うのでノーカウントだ。

私は部屋から出る為にドアの前に向かいドアノブを回す。

だが開かない。

……おかしい。ドアノブを回して開かないドアは最早ドアではな

い。ドアの形をした何かだ。どこでもドアはドアを超越した何かだが。

ならば窓から脱出しようとしてそこへ向かい、扉を開けようとする。

だが開かない。

いや、何故開かない。窓は空気を換気する為にある筈なのに、これは全く窓としての機能を果たしていない。どこでもドアは……やめた。現実逃避は止めましょう。つまりこれは――

閉じ込められた。

はつきり言うとなうなのだろう。目の前の現実を受け入れなければ前には進めないぞ私。

予想していたとはいえ、これは十中八九トリニティセブンの内の誰かの仕業だろう。この魔道学園に転校して数日は平穏を享受出来ると思っていたのに、転校初日から仕掛けて来るとは。この学園はどこまで私を嫌っているのか。泣きそうだ。

風呂にも入っていない。というかこれから入ろうとしていたのにそれすらさせないとは。恐怖を通り越して怒りが沸いて来た。

よし。こんな現象、無かった事にしてやる。私が想像する現象はこれだ。

――素粒子間時間跳躍・因果律崩壊

これも既知の知識にあつたものだ。自身と世界を素粒子化し、多元宇宙ごと過去の時間軸へ跳躍、それによる現在と過去の抑止力を利用して対象を消滅させる。 ■^第 ■^三 ■^天 の業のアレンジだ。

しかし本気でそれをしてしまえば世界が拙い。故に範囲を学園のみに絞り、効果を限定的にして極限かつ極小に抑える。要するに簡易型の術である。

とはいえ、これを例え全力で行使したとしてもメイガス達やトリニテイセブン、学園長には全く効果を得られないだろう。奥の手も隠し持っていたであろうし、私自身このような陳腐な業で倒せるとは思っていない。

既知の知識のお陰で幾万もの魔術を行使出来るようになったとはいえ、私は一般人であり、魔道に関しては初心者も良い所だ。

つまりあれらと比較すると、隔絶とした差があるのだ。それもまだ未完成。成長の余地があるのは此方もそうだが、相手も同じなのだ。もしかすると一生越えられない壁なのかも知れない。

兎に角、違和感が消え去り脱出に成功する。着替えと風呂の用具を持って行く事も忘れない。ちなみに下着に関しては急いで買いに行った。

しかし、廊下を歩いているが人の気配がしない。もう寝静まったのだろうか。

メイガス達は日々魔道の研究をしているのだから、毎日疲れ果てているのだろう。生活習慣がすっかりしていなければ身体が保たない。狂人の集団だというのに、そこら辺は遵守しており、何とも憎めない。

かく言う私も変化の連続で疲労が溜まっている。風呂で汗を流して直ぐに寝てしまおう。魔術を試すのは後からでも遅くない。



浅見リリスは思う。

この幼い少女は一体どのような人生を送って来たのだと。

「君にはこの学園に入学して貰うよ」

学園長室にて、この学園の長であるビブリアが少女、カール・クラフトに告げる。

カールは学園側に降参を意を示し、実質拘束状態となっていた。だがその様な状況下に置かれても平然と構えている姿。まるで動じていない、寧ろ何も問題ないと言わんばかりの態度。ビブリア学園長すら勝ち目がないと覚悟させられた実力を持つ彼女なのだから、その姿勢も当たり前であった。

「ん、分かった」

そして、ビブリアが告げた処遇についても、二つ返事で了承する。すると彼女が問い掛けた。

「私、この世界の魔道、良く知らない。教えて欲しい」
「!?」

それはリリス達に驚愕を与えるものだった。あの計都彗星を墜とす程の強大な術と力を保有しているというのに、魔道を知らないとは。

いや、彼女は「この世界」と言った。つまりそれは異世界から来たという事に他ならない。

恐らく、カールが居た世界の崩壊が原因となり、彼女がこの世界にやって来た一端を担っているあの崩壊現象が誘発された。そしてカールが虚無からの脱出の際に何かしらの方法を行使して世界規模の衝撃波へと繋がったのだろう。もしそうだとしても、彼女と同次元の存在がいたとなれば世界そのものが消滅してもおかしくない。もしかすると世界の真理、または摂理を知っている可能性も充分に有る。様々な憶測が飛び交う中、学園長は彼女にこの世界の魔道とビブリア学園について説明する。

カールは表情一つ変えずに説明を聞く。だが知っているかの様に聞いているそれは、この世界のあり方と現状確認をしている様にも見えたと。

「……大体分かった。ありがとう」

説明を終え、カールはぺこりと頭を下げる。その仕草は愛嬌があり、微笑ましいものがある。

しかし学園長の説明だけでこの世界の理を理解してしまったのだろう。彼女の神威が徐々にこの世界に適応している。寧ろ支配してしまわんとこの世界の理をも侵食していた。

「それでは、教室に案内します。ついて来ててください」

「分かった」

浅見はその現象に驚愕しつつも、彼女を自分が担当するクラスに紹介する為に案内する。その浅見の後ろからトコトコと付いて来る彼女は親の背を追い掛ける子どもの様だ。

ビブリアはその光景を見て微笑み、二人が去った後にそれを崩す。

「カール・エルンスト・クラフトIIメルクリウス……か」

彼は幼い少女の名前を反芻する。魔道を極める大魔王がその意味を知らない筈は無く。珍しく彼の表情は怪訝なものになっていた。

「まさか、ね」

ビブリアの疑問は絶えない。カール・クラフトの経歴は一切謎に包まれている。出生に関してもだ。それ故にどうしても知りたいと思わせる未知でもあった。

「ふむ、彼女の謎を解き明かすのも面白そうだね」

ビブリアはそう、不敵に笑った。

一方浅見は教卓の前に、カールはその隣に立ち、転校生の紹介をしていた。

「本日からここに転校して来たカール・クラフトさんです。皆さん仲良くしてあげてください」

浅見がそう言うも、生徒達は皆が静まり返っている。

転校生が来た前例はある。基本的に転校生の殆どは魔力が高い者達であり、その度に生徒達によって噂の一つでもされて騒ぎ立っていた。

だが今回は違う。誰もが彼女の魅力に目を奪われ、誰もが彼女に畏怖していた。

最初こそ彼女の静謐さと可憐さに好奇、好意と言った正の感情の籠った視線が注がれていたものの、直後に恐怖へと変質した。

神威。

僅かに漏れ出ているそれ。可憐な容姿と幼い体格に不釣り合いである神威を感じ取り、本能が恐怖しているのだ。

「カール・エルンスト・クラフトⅡメルクリウス。

……よろしく」

その異常な状況下に置かれている場であつてもカール・クラフトは平然としており、淡々と自己紹介を済ませる。

誰もそれに応えない。否、反応出来ない。彼女の紡ぐ言葉だけで魂を鷲掴みにされる錯覚を受けているメイガス達では最早抗う事すら出来ないのだ。

「……ッ」

それを初めから解っていたかのように、カールの表情、瞳は無色から悲哀の色へと変える。

それを横目で視認した浅見は何も言えなかった。カールが異常極まる存在であるのは浅見も既知である。

故にそれが問題なのだ。世界法則から逸脱した存在。法に囚われず、逆に己の法則を以って支配下に置ける神威とは人間にとって忌み嫌うもの。

世界の化外であるカール・エルンスト・クラフトⅡメルクリウスは万人に拒絶されてしまうのだ。彼女にその気がなくとも、因果がそうさせる。

しかしカール・クラフトはそれすらも操る神格そのものだ。だがそれをしないという事はどういった意味を持つのか。

すると、カールは扉に向かって歩き出す。

「ち、ちよつと!?! カールさん!?!」

「……先生」

「な、何でしょう?..」

不意に声を掛けられ、驚き少し焦りながらも返事をする。彼女からは既に神威を感じられなくなっていた。

「私、異端の存在。だから此処に居ない方が良い。」

……さよなら」

「!」

か細い声でそれだけ言うと、教室から退出してしまう。その時の彼女の背中が、やけに寂しく感じた。

浅見は理解した。何故態々神威を発してまでメイガス達に恐怖の感情を植え付けたのか。

そうしなければならなかったのだ。自分は、カール・エルンスト・クラフトⅡメルクリウスは化物か、それ以上の存在なのだ。その行為だけで、彼女の経験した壮絶な人生を物語っている。

実を言えばカールと初めて邂逅した時、彼女の神威に当てられて気絶したメイガス達は半数以上に上っている。彼女はそれを予め知っていて、態と自分から遠ざける行為を取っているのだ。

『With great power comes great responsibility.』
「大いなる力には、大いなる責任が伴う」と言う言葉がある。アメリカンコミックス『スパイダーマン』に登場したものだ。

彼女はその強大なる力を持っているが為に、伴う責任を果たさねばならない。その際に、他人を巻き込みたくないのだ。友人ならば尚更である。過去にそう言った悲劇を経験してしまっているのだろう。あの哀愁漂う雰囲気はそれが原因となっている筈だ。

常人なら発狂するであろう出来事を経験して尚、平然としつつ彼女が人間だと自称する理由が多少なりとも解った気がする。

優しすぎるのだ、彼女は。

故に友人を作らない。作るとしても、彼女と同等の力を持つ者のみに限られる。だがカール・クラフトに見合うだけの力を持つ者が果たしてこの世に存在しているだろうか。

「……………」

浅見は苦悩する。全てでは無いが、カールの抱える壮絶な過去の一端を理解した彼女は、出来る限り支えになりたいと思うようになった。

しかし浅見にはそれをするだけの力が無い。カールが強過ぎる為に。他のトリニティセブンや魔王であろうと、彼女には釣り合わない。

心の底で泣いているであろう彼女を孤独から救い出すにはどうすれば良いのか。浅見にはそれを見出せない。

それが何よりも悔しかった。

神無月アリンは思う。

カール・クラフトとはどこまで化物染みているのかと。

ビブリア学園に戻って来た彼女は早速ながらとある噂を耳にする。それは転校生の話。メイガス達から盗み聞きをするに、転校生はなんとあの大魔公と同等の実力を持つ少女らしい。同じトリニティセブンの一人である浅見リリスと一悶着あり、お返しとばかりに巨大隕石を墜としたそうだ。

何て馬鹿げているのだ。神無月はそう思わざるを得なかった。魔王や大魔公同士が争えば世界崩壊は確実。だが世界規模の天変地異を引き起こし、挙げ句の果てに魔道ではない何かを扱うなど見た事も聞いたことも無い。

それ故、神無月は否が応でも彼女の實力を身を以て知りたかった。それがどのような結末を迎えるとしても、後悔しないつもりでいた。

とはいえ、真っ向から挑むのは御法度。最強の魔道士である大魔公すら勝ち目がないと言わしめた程の力を持つ少女と手合わせをする

のは御免蒙る。この世界の魔王となり、番になるとある少年とまだ邂逅すら出来ていない時点で命を落とす様な行為は避けるしかない。そこで神無月は少女の部屋に魔術で細工をした。所謂、部屋を別の空間へと転移させ遮断する術式。『箱庭術式』とでも名付けようか。何れはこの学園に転校するであろう少年にも仕掛けるつもりである。この術式の対象の第一号が彼ではない事は残念だが、致し方がない。

しかしこの術式はベッドの裏に施している。正攻法な手段はそれを破壊すれば良い。少女なら即座に看破されてもおかしくはない。

先ずはお手並み拝見。如何様にしてその空間から脱出するのか。

「……あの転校生はどうするのかしら」

校舎の屋上で、それを傍観する神無月アリン。カール・クラフトの術を見られれば良し。もしもそれを此方で模倣出来るのなら尚良し。これは単なる小手調べではなく、計算されたものだった。図書館から帰って来た所を見計らい、箱庭術式が発動する。

カール・クラフトに変化は無し。行動といえば変わらない態度でドアと窓の異常を確認するのみ。恐らく術式がベッドの裏に施してある事は気付かれている為、このまま術式を破壊なり消滅なりすると踏んでいた。

筈だった。

「!？」

突如として、カール・クラフトから凄まじい神威が溢れ出る。急激な変化に神無月は驚愕を隠せない。

(何……あの子の力。桁外れにも度が過ぎる……!)

そして神無月は異常に気付く。箱庭術式が、いや、カール・クラフトを閉じ込めていた筈の空間に無数もの亀裂が走っている。彼女の神威に空間そのものが耐えられないのだ。

理解出来る。あの少女は憤怒に染まっていると。

これは余りにも計算外だ。彼女を怒らせるつもりは無かったが、ま

さかここまで怒りに染まるとは。

しかし少女、カール・エルンスト・クラフトIIメルクリウスの本領はここからだつた。

彼女はまるで指揮者をしているかのような動作を取る。その動作に一体どういった意味が込められているのかは解らない。

だが、神無月アリンは知る事になる。

グランギニョル
恐怖劇の一端を。

—	—
Om	Ab
nia	ovo
fe	us
rt	que
ae	ad
tas.	mal
—	la.

「あッ……ガア……ッ!？」

ノイズが走る理解不能の言語が紡がれた瞬間、神無月に形容し難い苦痛が襲う。

何だこれは。理解出来ない。これは痛みの概念に類するものではない。まるで存在そのものにダメージが入っている様だ。

世界の根源から消失せんとする感覚。世界の抑止と消滅現象に巻き込まれた対象は始まりから無かったことになる。この業はそういうものなのだ。だが、誰も理解出来る筈がない。これは神のみが振るって良い業なのだから。

その業の被害は神無月のみに非ず。この学園全てが意味不明な術の範囲内に指定されており、メイガス達は愚か、トリニティセブンである浅見や果てには学園長すら神無月と同じ苦痛を味わっている。

そして神無月は魔力に大きなダメージが入っている事に気付く。同時に全身の力が抜け、倒れ込んだ。

「う……ぐ……あ」

神無月は恐怖した。これは魔王で在ろうとどうにもならない存在だと。むしろ指先一つで消し飛ばされるのではないかとすら思わせる程に。魔王の存在が矮小に思わされるとは神無月にとって生来初

めて味わう未知である。

しかも恐ろしい事に、この術は相当な手加減が加えられてあったのだ。もしも全力で行使された場合世界が、いや、多次元という単位で宇宙が消滅していただろう。

それらを振り返り完全に此方に非があると自覚する。触らぬ神に祟りなしとは良く言ったものだ。彼女の逆鱗に触れ、今こうして消滅寸前にまで追い込まれた。後悔先に立たず。

故に神無月アリンは決意する。

彼女、カール・エルンスト・クラフトIIメルクリウスには無闇矢鱈に接触しない事を。

その数日後、この世界の魔王になるべき少年が一人の幼馴染みを救おうと転校して来るのである。

3. ツンデレさんと邂逅した。逃げる様に私は一般人を自称する。

どうも、おはこんばんにちは。カール・エルンスト・クラフトである。

いよいよ既知感を覚え始めて来た自己紹介だが、そこまで気にする程でもない。既知によって得た知識では那由多の彼方まで回帰し続けた者がいるらしい。全く、それはどれ程の変態だったのだろうか。まあ良い。

私がこの魔道学園に転校し、二週間が経過した。今の所はトリニティセブンによる襲撃も無く、平穩に過ごしている。

初日に盛大にやらかしてしまった私はそれ以来あの教室に馴染めないでいる。とはいえHRには参加しており、そこからは図書館で大量の書物を漁るのが日課になっているのが現状だ。

私としては魔道学園にもHRがあるとは思わなんだ。メイガスを育成する場であり、学園でもある訳だからそこら辺は普通の学園とは何ら変わりはないのだろう。

今日も現在進行形でぼっちの道を突き進んでいる訳だが、何も悪い事ばかりではない。私は元々静かな場所を好んでいるから今の環境は最適と言って良い。それに他人に自分がどのような魔道を研究しているのかを探られたくないというのも理由の一つだ。トリニティセブンに対抗する為に魔道の基礎を築いているなど向こう側は思えないだろう。

そういえば昨日から浅見リリスの姿が見えない。何処かにほつき歩いているのだろうか。まさかあの豊満な胸と見事なまでのスタイルで男を籠絡しているのではないだろうか。

……駄目だ。浅見リリスのナイスボディを想像し、自身の身体を見る。胸はペったんこ、身体はちんちくりんな私では相手にならない。

ま、まあしかしこの身体にも利点はある。例えば胸が邪魔で出来ない動きを可能にするとか、肩が凝らないとか。インドアのイメージが

強そうな私だが、実はアウトドア派だ。こう見えて運動は人並み以上に出来ると自負している。この学園に編入する以前は趣味でCCCを勉強していた程だ。勿論独学である。ベースはダンボールの人。それはさておき。浅見リリスの姿が見えないのには理由がある。何でも崩壊現象の調査に向かっているらしい。

確かに私も妙な力を感じ取った。あれは一昨日の時だったかな。私がこの学園に来るきっかけになった崩壊現象とほぼ似通っているようにも思えた。

そして昨日から浅見リリスが崩壊現象の発生した地点へ向かったのだろう。これはトリニティセブンの持つ使命の一つなのだから崩壊現象の解決に尽力するのは当たり前だ。

浅見リリスは強い。あの時私が発動した計都彗星を消し飛ばしたのだから。崩壊現象の解決も時間の問題だろう。

それにトリニティセブンが一人でも学園に不在であった方がこちらも気が楽になるというもの。浅見リリスと同等のメイガスが七人いるだけで気が滅入りそうなのに、一斉に敵に回られたら一溜まりもない。

もしそのような状況になったら自害してやる。自害せよ、ランサー。ゲイ・ボルクは今日も必中（笑）扱いされて不憫です。

とはいえ、トリニティセブンから仕掛けて来る気配はなさそう。この二週間の平穏は私の心を癒してくれる良い時間になった。

しかし油断は出来ない。私にとっての平穏がいつ崩れるか分からないのだ。

トリニティセブンだけではない。一般的なメイガスでさえ油断ならない。何故ならみんなが狂人で戦闘狂のヒヤッハー集団だからだ。（※違います）

ふむ、この二週間図書館に籠もりっぱなしもあつてか、身体が鈍っている。今日は気分転換に走りに行くのでしょうか。

……支給された体操服を着てみたのだが案の定だばだばだった。やはり私の身体はちんちくりんである。悲しいかな（泣）

やはり娑婆の空気は美味しいものだ。……ただ外に出ただけなのが気にしない。

走るルートは既に確保してある。この魔道学園の敷地面積は非常に広く、学園から見下ろすと街並みが一望出来る。そして学園と街を合わせた学園都市の全体図を見ると周りを囲うかの様に壁があるのだ。その壁の上の通路をランニングのルートとして利用している者はそこそこいるとか。

今の私は風だ。風邪じゃない、風だ。気分はセリヌンティウスを身代わりにして「イイイイイヤツツヒイイイイwwww」と叫んでいるメロスである。……あれ、メロスはこんな性格だっただろうか。まあ良い。(※良くないです)

ランニングコースを駆け抜けて行く。一步步前進し、風を身体で感じる。ああ、なんと心地良いのか。素晴らしい。生への躍動、魂の底から歓喜に打ち震える様だ。これこそ正に至高である。

私は今、生きているツ!!!

(※ただのランニングです)

ランニングを始めて少し経過した頃、私は街並みを眺めつつ感慨を覚えていた。

因みにこの学園都市は広く、街並みが入り組んでいる故に初見だと迷いやすい。私も地図と直に住んでいる人への聞き込みと案内が無ければ確実に迷っていたらろう。

元々学園都市の入口から入らず、不法侵入という形で学園に来た私の場合、下着を購入する為に初見で学園から街へ向かうという通常ミッションとは違う裏ミッションを受けている気分になった。

初めて見たが、美しい景色だ。この学園都市は田舎に存在しているからか、とても自然が似合っている。ただ魔道は一般世間において秘匿にされている為に、知る人しか知らない景色でもある。

いつメイガス達に襲われるか分からずビクビクして余裕が無かつ

だが、運動しているお陰もあってリフレッシュ出来た。

ああ、とても良い場所だ。休日はこちらで丸一日景色を眺めて過ごすかな。風景画を描くのも良いかも知れない。因みに私の美術の成績は5だ。

半刻ほど走り込み、給水をしつつ休憩していると、妙な気配を感じた。

ふむ、この気配。なんというか禍々しいものを感じる。あれだ、良く有るバトル物の漫画で出て来る魔物とか悪に属している人物の発している闇の様なものだ。だがヤンデレだけは闇とか愛とか血とかをねるねるねるねしたドロドロの液体だからNG。School Day'sはもう見たくない（ガクブル）

さて、気配が発せられている位置は此処から少し離れた廃墟か。走って行けば一刻は掛かるだろう。

しかし私には既知感から得た知識がある。それには当然空間跳躍の魔術もある訳で。以前使用した『素粒子間時間跳躍・因果律崩壊』が世界を自身ごと素粒子化して過去に跳躍する秘術故、それと比較すると空間跳躍の難易度は然程難しくない。寧ろ魔道を学ぶ上では誰でも習得出来る難易度イージーな魔術だろう。

では、魔物がいるであろう地点を目標に空間跳躍しよう。

跳べ！ マークニヒトオ!!!

着いた。そして金髪のアホ毛が特徴の少女がいきなり危機に陥っていた。どうということなの……（困惑）

私には全く状況が理解出来ない。しかし金髪の少女が見た目ツンデレ属性をお持ちになっている事だけは瞬時に理解出来た。

ふふ、この私の観察眼の鋭さよ。間違いなくあの少女はツンデレである。面白そうな少女だ。

いやいや、待て待て。今あの少女はピンチに陥っているんだった。何を考えているんだ私は……。

だがあの少女が持っている大きい水晶球なら鈍器として使っても勝てそうなのだが……。相手はたった一人、いや一匹しかないのだから。

ふむ、しかし本当に魔物が存在しようとは驚いた。これには青鬼界最速の男、ボ○トの異名を持つフワツティーも驚きの表情だ。空気抵抗を受けやすい体の何処からあの推進力が生まれるのやら。

なのだが、魔物にしては妙だ。この魔物は単なる魔物ではなく、まだ意識を残しているかの様にも感じ取れる。

すると、あの魔物から私に何か訴え掛けてようとしているのを感じた。何か話かけようとしているのか。一体何を話そうとしているのか……。身体が震える震える。

仕方なく私は意識を集中する。そうすると言葉が聴こえてきた。

『……す……て』

ううむ、これでは良く聴こえない。もつと集中しなくては。

『た……す……て』

……これは。

『た……す……け……て』

……成程。どうやら私に救いを求める声だった様だ。声からして女性の様だ。

人の意識が残留している、という事はつまりあの魔物は元々は人だったという事。そうすれば色々と辻褃が合う。

あの金髪の少女からは浅見リリスと同等の力を感じる。もしかしたらトリニティセブンなのかも知れない。もしそうだったら私はジョースター家による伝統的な戦いの発想法にしてひとつだけ残された戦法、『逃げる』を即座に使うだろう。まあ逃げるにしても人を見捨てるのは流石に気分が悪いので最終手段だが。

浅見リリスと同等の力を持っている金髪の少女なら魔物一匹を倒す事など造作もない筈だ。しかしそうせず危機に陥ったのはあの魔物が異形に堕ちる前に彼女と有効な関係を築いていたのだろう。

それ以外なら……あれか、百合百合しい事をしていたとか。十八禁の行為をしていたとか。もしも男性だったら十中八九エロいシチュエーションになっていたんだろう。おっと危ない、鼻血が出そうだった。

さて、あの魔物をどうにかして元に戻したいのだが……。ん？ 金髪の少女が何か言っている。

……え、魔物になってしまった者は二度と元に戻れない？

なん……だと……？

どういう事だってばよ。それでは助けたくても助けられないではないか。ファフナー並みに絶望したぞ。

いや、待て。ファフナー……。ファフナーといえば同化現象。確かフェストウム絶対殺すマンことマークザインがルガーランスでシャイニーして周りを同化し、コクピットごと同化されたパイロットを元に戻したシーンがあった。

その手があったか。

善は急げ。既知感から得た知識を応用し、人の大きさに合わせるよう調整したルガーランスを無から精製。

おお、本当に無からルガーランスを精製出来た。既知感の知識が万能過ぎて辛い。寧ろ全能かも知れない。

ではルガーランスのご開帳。ぱかっと開いたルガーランスから光が溢れ出る。光が綺麗過ぎて逆にこっちが同化されそうだ。まあ冗談だが。

するとどうだろう。魔物が苦しそうに蠢いているのが分かる。人だった時の残留意識は大丈夫なのだろうか。これで失敗したら笑えない。

あ、ヤヴァイ。今更緊張して来た。寧ろ今まで緊張しなかった自分を褒めてやりたい。

そして今回もお馴染みの突然口から謎の言語が発せられる。何の意味なのかさっぱりだ。

謎の言語が発せられると同時に魔物がフアフナーに出て来る同化現象と同じ様に翠の結晶と化した。宝石の如く綺麗だ。幾らぐらいで売れるだろうか。

瞬間、結晶が砕け散り、そこには魔物ではなく一人の少女が倒れていた。どうやら気絶しているだけで他の部分に支障は無い。

やっ た ぜ (ドヤア)

金髪の少女の危機と魔物の両方を救えた。もう此処に用は無い。ルガーランスを消してすたこらさつさと退散しよう。

しかしそうは問屋が卸さない。すぐさま金髪の少女に呼び止められた。アイエエエエエエ!! ナンデ?! キンパツナンデ?!

わ、私が何か悪い事をしたのか? 彼女の癩に触る事をしてしまったのか?

ハッ!? まさか百合百合しい事を! (※違います)

いや、違う。きつと私がツンデレ属性だと見破った事に気が付いているのだろう。それを他のメイガス達に広められてしまえば黒歴史は確実。それを阻止するには口止め又は始末するしかないだろう。

拙い、これは拙いぞ。秘密を暴露されるのを阻止しようとする人間はみんな恐ろしい程の力を発揮する。つまり私は此処で始末されるという事か。ヤメロー! 死ニタクナイ! 死ニタクナイ!!

……え、私の名前?

ああ成程、どうやらこのツンデレ金髪少女は私を始末するのではなくただ名前を聞いたかっただけの様だ。安心した。

まず私は他人の秘密を周りにバラしたりはしない。平穩に過ごすが私の目的なのだから、そのような厄介事の種になりそうな話題をバラすなど愚の骨頂だ。

そしてツンデレ金髪少女の名前を聞く。互いに自己紹介するだけなら何の問題も無い。

え、『^{スベルビア}傲慢』のトリニティセブン、山奈ミラ?



山奈ミラは苦悩する。

目の前にいる魔物がかつて彼女の数少ない友人である事に。

山奈ミラはトリニティセブンになる以前は強大な魔力を持つ一人の少女である。

何か特別な才能が有った訳ではない。魔術に秀でている技術があつた訳でもない。ただ魔力が強大なだけの少女だった。

メイガスは魔力が強大であればあるほど暴走した時のリスクが大きくなる。彼女はそれに怯えていた。

魔道を志し、メイガスとなった後もそれは消えず、自己主張があまり出来ない引っ込み思案な性格も相まって、他人から距離を取る毎日を過ごして来た。

それこそが山奈ミラの美点であり、欠点でもある。心優しい彼女は自らの魔力の暴走を危惧し、敢えて近寄らない選択肢を取る事で皆を巻き込まないようにしていた。

浅見リリスは当時から教師をしており、彼女をととても心配していた。だがそれに対してさえ何も返せなかったのだ。

しかしある日、苦悩の渦にいた山奈の手を取ったのが不動アキオであつた。

彼女、不動アキオは豪放磊落ごうほうらいらくな性格で山奈を連れ出し、親しく接してくれた。面倒見が良く、他人の気持ちを先んじて察する繊細な一面を持つ彼女だからこそ山奈は彼女に懐くようになる。

そしてもう一人、山奈がメイガスに成り立ての頃から心配し、いつ

でも優しくしてくれた者がいる。

彼女の名は天瀬ナナオ。魔道士としての実力は高く、周りからの人気も高い人望のある少女だ。

快活な不動アキオとも相性が良く、プライベートから魔道の研究まで、付き合いはかなりもの。山奈ミラの根幹を不動が支える者なら、天瀬は影から支えた者と言って良い。その際天瀬は山奈のサポートに回る為に王立図書館検閲官の第四席に就いた。

不動と天瀬、山奈が共に行動して数日後、ある実験で失敗した山奈を不動が励ます出来事があった。それ以降、彼女も真つ直ぐな性格の不動アキオの様に、そして自らの力に責任を持つ天瀬の様に『自分の力に責任を持つ正義の味方』になりたいと決意した時、天瀬は嬉しさのあまり号泣した。それを見た山奈と不動は相当焦つたのだがそれは置いておこう。

山奈が研究する魔術のテーマは「正義」、『傲慢』の書庫に属するものである。

不動アキオは当時からトリニティセブンであり、天瀬ナナオも同じ『傲慢』の書庫に属する「総括」をテーマにしており、山奈の魔術の研究をサポートする事が出来た。

彼女ら二人の支援と山奈が持つ強大な魔力を以って魔道の研究に勤しめば、魔術に秀でている才能が無くとも問題はない。

山奈ミラは天才ではなくとも秀才ではあった。一を知って十を学ぶのではなく、十を知って十を学ぶ。教えられた事、魔道の研鑽によって得た知識と技術を確実に我が物とする事こそ山奈ミラの真骨頂である。

故に山奈が魔道士として頭角を現すのも時間の問題であった。水を得た魚のように魔術を極めて行くその姿を不動と天瀬は微笑ましく見守り、一年が過ぎる。

遂に山奈ミラは『傲慢』のトリニティセブンとなり、王立図書館主席検閲官として就任。不動、天瀬、山奈の三人による新体制がここに開かれ、着々と任務を遂行する日々が始まったのだった。

そして検閲任務中に編入として入った一人の少女。その際に広

まった噂や情報が山奈の耳に入らない訳がない。学園に戻り次第、少女が不浄な存在かどうかを確かめる為に接触しようと考えていた。

だがそれ以上に気になる事がある。それは今回の検閲任務を遂行する少し前から先輩であり友人である天瀬ナナオの姿が見当たらないのだ。

嫌な予感がする。彼女の胸中で胸騒ぎがしている。検閲任務を終えた彼女は焦燥に駆られつつ天瀬の安否を確認且つ搜索活動に専念した。

「先輩……無事でいて下さい」

懇願する様に彼女の無事を祈る。早く、早く見つけ出さねば。このままだと取り返しのない大事になる。山奈ミラを支える根幹の一つが崩れ去ってしまいそうな気がしてならない。

魔道の研究によって天瀬の魔力の色を知っていた山奈はその魔力を行方を辿りトリニティセブンとしての技術を総動員し、索敵魔術を使用して徹底的に搜索した。

「っ、居た……い」

搜索して一刻、ようやく彼女の魔力が濃く残っている位置を発見。天瀬ナナオがそこにいる可能性は極めて高い。

だが彼女から感じられる魔力が禍々しく感じられた。

まさか。いや、そんな事は。

トリニティセブンである山奈に彼女がどのような状態となっているかは察しがついていた。しかし山奈にとってその現実には忌避すべき現実である。彼女はその現実から逃げるように天瀬が無事だと信じて検閲任務へ赴いた。

「……先輩ッ」

歪む表情。今まで不動と自分、そして天瀬の三人で過ごして来た日常。今更壊そうなどと思う事は絶対に有り得ない。山奈を変えてくれた二人に感謝し、恩を返してもこの関係は続けていたい。これからも、ずっと。

その日常を壊され、奪われるなど認めない。絶対に認めない。もしもその大切な日常を奪おうとする敵がいるのなら、力の限りを尽くし

て相手の全てを奪う事に躊躇などしない。それ程までに彼女は不動と天瀬が大好きだった。

「……………」

目的地に辿り着く。そこには一つの廃墟。魔道書である『鏡の国の書』を取り出しメイガスモードとなり警戒しつつ中を探索、索敵する。夕暮れ時であり、辺りは暗くなりつつあった。

靴の音だけが辺りに木霊す。魔力が濃く残る位置まであと僅か。そして。

「先輩！ 無事でした……………」
絶望する。

そこにいたのは異形。魔力暴走を起こし、堕ちてしまったメイガスの成れの果て、魔物である。

「ツ……………あッ……………」

追い付かない非情な現実。理解したくない現実。嘘であつて欲しい現実。今までの思い出が蘇り、儚く砕け散る。

視界が揺れる。足元がおぼつかない。足の力が抜け、へたり込む。壊されてしまった。無くなつてしまった。大切な日常が、大切な存在が、彼女の根幹の一つが根こそぎ抉り取られた感覚が襲った。

何故、このような事になつてしまったのか。天瀬がいなくなる前に自分が対処していれば、と思つた所で山奈は気付く。

まさか、嫉妬していたのか。当時からトリニティセブンだった不動と後から追い抜く様にトリニティセブンとなつた自分。その事実聚焦っていたのではないだろうか。

天瀬ナナオは天才でもなければ秀才でもない。山奈の様に強大な魔力がある訳でもない。何も持つていない彼女は努力だけで高位の魔道士になつてみせた。だからこそ隣にいた二人が遠い場所まで行つてしまう事が怖かつたのだと。

だからこそ悟られたく無かつた。彼女達に対し、嫉妬よりも親愛の情が上回つていたから。心配をかけさせまいと気丈に振る舞つていたのだろう。

確か、以前彼女の研究の一つを盗み見る形で閲覧した事がある。そ

れには魔力を増幅させる魔術実験の内容が記載されてあった。

トリニティセブンになるには強大な魔力を要する。努力だけで高位の魔道士にはなれても、限界がある。故に天瀬ナナオはこの実験に手を出した。成功すれば“カルディナリス枢機”クラスの魔力を得られるが為に。

だがこの実験はあまりにもリスクが高過ぎた。失敗すれば魔物に成り果てる。成功率は天文学的数字。成功は不可能といえる無謀な実験内容である。

それを分かっている、天瀬ナナオは実験に手を出した。追い付きたいが為に。追い抜かれないが為に。停滞している自分を新生し、新たな一歩を踏み出す為に。

だが失敗した。焦燥に駆られ過ぎたばかり失敗したのだ。その時は親愛を嫉妬が上回ったから。

不動と山奈を想って自制していればこうはならなかった。成功率は天文学的数字の無謀な実験を前に諦めていれば良かった。そもそも二人が天瀬を置き去りにしなければ嫉妬などしなかった。

山奈は天瀬を置いて行ったりはしない。不動も同じ考えだろう。寧ろ努力だけで高位魔道士になっているその実力、技術面でいえば二人すら凌駕している。尊敬の念を抱かざるを得ない程だ。

だがそれを天瀬本人が知らなかった。なまじ己が凡才である事を自覚していた為に。

「あ……………うああ……………」

ぼろぼろと涙が零れ落ちる。山奈の優しい面が表に出てしまったのだ。

(私が、先輩の苦しみに気付いていれば……………!)

濁流の如く押し寄せる後悔。あの時、他人の気持ちに敏感であったなら。

しかし山奈が気付かないのも無理はない。他人の気持ちを先んじて察する繊細な一面を持つ不動でさえ気付かなかったその演技力は一流だ。魔道を研究している過程で得た技術の一つなのだろう。魔道士は心理戦によって勝敗を分けられるパターンが多いのだから。

元々ポーカーフェイスを貫くスタイルが得意な彼女にとって心理戦は得意分野であった。

そうまでして、自分達に迷惑をかけたくなかった。心配されたくない。こうなってしまう原因の一つとして彼女のプライドも挙げられる。

だが山奈がそれを考えている余裕など無かった。

「先、輩……………」

心が軋む。今にも砕け散りそうだ。

魔物に堕ちてしまった者を元に戻す方法は無い。人間が食屍鬼グールに成り果ててしまうのと同じ様に、人でなしの化物に堕ちてしまえば手遅れなのだ。

敬愛し、山奈の根幹となった少女はもういない。この事実が精神を汚濁し続ける。

「誰か……………」

信頼関係を気付いてしまった為に山奈ミラは正義を実行出来ない。この魔物をどうしても不浄な存在だと思いたくない。そういう存在だと認識したくない。

故に助けを求める。こんな悲劇を、理不尽を塗り潰してくれるだけの救世主を。願うだけ無駄であり不可能な救いを求めた。

「助けて、下さい……………」

瞬間、

「分かった」

神威が体現する。

「え……………」

突然の出来事に呆然とする山奈。彼女の視線の先にいる存在を見た。

妖精。

誰もが見て美しいと、可憐だと言うだろう幼い容姿に体躯。そして

誰もが恐れおののく神威を発している少女。

救世主の様に現れた彼女はこちらに向かつて悠然と歩いて来る。

山奈は我に帰り、少女に向かって叫ぶ。

「な、何をしようとしているのですか!? 一度魔物に堕ちてしまった者は二度と元には戻りません! 人間に戻すなど不可能です!」

ああ、自分は何を言っているのだろうか。救いを求めたのは自分自身の癖に。それを否定しようとするとは、自分こそ何をしようとしているのか。

叫びながら山奈は自虐する。それは不可能な事を目の前の少女が本当にどうにかしてくれそうだと思わされたから。救ってくれると希望を抱いたから。哀れだ、と自らを罵った。

「問題ない」

しかしそれすら少女は一蹴する。何処からともなく槍の様で長剣の様な独特な形状をした近未来の兵器に似た武器を精製する。それを見た山奈は驚愕した。

(あれは魔道書ではない……。しかもあの武器は錬アウター金アルケミック術で精製されたものではなく、百もの魔術を織り交ぜられて無から創られている……。あんな高難易度の魔術を息をするかの様に精製するなんて……!)

少女を解析する事は出来なかったが、精製された武器を解析すると有り得ない程の技術が詰まっていた。

百もの魔術、正確には一〇三もの魔術構築によって精製される武器はかの魔王兵器に匹敵する。

故にその武器の魔術構築は理解出来ても、構築方法や起源が一切理解出来なかった。

「……………」

その武器を魔物へ向ける。すると刃の部分が開き、そこから金色に輝く光が魔物を照らした。

刹那、魔物が苦しみ出す。だが暴れる事はなく、異形の身体を震わせるだけに止まっている。

山奈には感じ取れた。魔物から急速に不浄なものが取り除かれて

躍というこれまた高難易度な魔術を目の前で使われ、再び驚愕する山奈。

「う、うくん」

「ッ！ 先輩ッ！」

「おおっ!? ビックリしアイタツ!?!」

カール・クラフトと入れ替わる様に目を覚ました天瀬を見て感極まった山奈は目尻に涙を浮かべて抱き着く。その行為に驚き、咄嗟に受け止めた為に倒れてしまい後頭部を地面にぶつけてしまった。

「あつ、すみませんっ。つい……」

「だ、大丈夫だよ……」

痛みで少し顔を青ざめてさせている天瀬だがそこは何とか持ち堪えた。少しして痛みが引き、今だに抱き着いている山奈を包み込む様に背に手を伸ばす。

「ごめんね、ミラ。私、負けず嫌いだったから」

「先輩……」

「我慢ならなかったの。先輩として立つ瀬が無かったから。だけど反省してる。成功率が天文学的數字の実験に手を出してしまう程、焦ってた」

「私の所為で、先輩は……ッ」

「ミラが謝る必要なんてないよ。これは力を求めて危険すら省みなかった私の過失。自らの力に責任を持ちなさいって言ったのは私なのにね。先輩失格だよ……」

困った表情で語る天瀬。かつて山奈に言った言葉を自分が守れず間違いを犯してしまった事を後悔していた。もしもカール・クラフトが救ってくれなければどうなっていたか。悲劇は免れなかっただろう。

「だから私、あの子がくれた二度目の生を無駄にするつもりはないから」

「二度目の、生?」

「うん、一度私は死んだ。魔道実験に失敗し死んで魔物になった。元に戻った今の私は二度目の生を貰った天瀬ナオ。」

だからね、ミラ。今度は間違えないから。今度は貴女の先輩としてちゃんと格好良い背中を見せるから……」

「……先輩いつ……！」

その言葉を聞き、抱擁を強くした彼女は泣き出す。声を上げて泣いた。それを天瀬は母の様に胸を貸して山奈が泣き止むまで背を優しく摩り続けていたのだった。